



産業医科大学病院  
臨床研究推進センター  
センター長・診療教授

岡田 洋右 先生

**Calm**  
Approach to Glycemic Variations

対談

第20回

## 糖尿病診療におけるデジタルヘルスの今 ～血糖変動を捉える～

**岡田** 本日は「糖尿病診療におけるデジタルヘルスの今」というテーマで、東京慈恵会医科大学の西村理明教授をお招きして情報通信技術、デジタル技術を活用した医療の最前線とその課題についてお話を伺います。持続血糖モニター（CGM）の登場により低血糖を可視化し、治療標的でもある「低血糖を

避ける」という非常に重要なメッセージは、現在広く医療関係者の方に理解していただいたのではないのでしょうか。そこで進化しつづけるCGMを用いた臨床の実際について、先駆者でもある西村先生に新しい機器の情報なども交えながら、お話を伺いたいと思います。よろしくお願いします。

東京慈恵会医科大学  
糖尿病・代謝・内分泌内科教授

## 西村 理明 先生



### デジタルヘルスの現状と課題

**西村** まず糖尿病ほどデジタルヘルスと親和性が高い疾病はありません。とくにCGMの進化はめざましく、オンライン化され、血糖変動パターン、さらには薬物治療、生活習慣などの影響を含めたデータがわれわれに呈示されます。糖尿病患者の血糖変動はまさしく十人十色で、そのパターンは患者さんごとに異なります。それを確実に捉えて見える化し、患者さん自身が血糖変動を知り、われわれが評価できるようになりました。このデジタルヘルスは、糖尿病診療に多くのメリットをもたらします。

最近発売されたグルコースモニタリングシステムのFreeStyle リブレ2は手動でスキャンする必要

がなくなり、グルコース値を自動的に測定してクラウド上にアップロードしてくれるようになりました。データにアクセスする権限を患者さんから付与してもらえれば、医療従事者はどこにいても診療ができるようになっていきます。患者さんが来院しなくても対面診療と同様に病状を把握できるため、とくにコロナ禍では遠隔医療において有用でした。しかしながら、現在デジタルヘルスが十分に活用されているかという点必ずしもそうではありません。理由の一つとして診療報酬の問題があると思います。たとえばコロナ禍前までは遠隔診療によるインスリンの指導にほとんど保険点数は付いていませんでしたが、現在はインスリンの指導料として対面診療の85%が算定できるようになりました。今後、遠隔診療に対する診療報酬が思いきって引き上げられ

会員限定コンテンツのため、med パス会員にご登録、  
またはログインが必要になります。

